

「遺伝子と日常の病気」

京都府立医科大学教授・衛生学 阿 部 達 生

新潟大学医学部教授・内科学

柴 田 昭

この度、わが国を代表する遺伝学者、京都府立医大衛生学教室の阿部達生教授の手になる「遺伝子と日常の病気」が発刊された。遺伝子を抜きにして医学を語ることはもはや不可能となった今日、まことに時宜を得た出版と思う。

書評に入る前に著者について一言触れなければならない。著者は現在、基礎医学の教授であるが、20年近く内科学教室で研鑽を積まれた。その臨床的実力のほどは188頁にあるメトヘモグロビン血症の症例発見のエピソードに端的に示されている。内科学教室で長い間、血液学一中でも細胞遺伝学(染色体の研究)に携わり、その後必然的に分子遺伝学に進まれ、現在は人類遺伝学に至るまで幅広い活動を続けておられる。その軌跡はハッキリとした1本の太い筋で貫かれている。場当たりの流行を追う研究者ではないのである。この背景を知るとは本書を読む際の大切なキーポイントになる。すなわち、著者は分子遺伝学を語りながら、絶えずその成果の臨床への還元、人類遺伝学への展開応用を意識しているのである。

本書は300頁余りの本で、全部で

10章から成る。既に述べた背景から、まず染色体とその異常から説き起こし、遺伝子とその異常、更に現代生命科学の輝かしい勝利である遺伝子組み換えと遺伝子地図作成に筆を進めておられる。これらの記述の著しい特徴は、1つの事項の歴史的なバックグラウンドを詳しく述べておられること(物事の理解の最短距離だと思う)、および著者自身が長期間、手を汚して携わってこられた方法論にも詳しいことである。単なる文献の羅列でなく、そこに著者自身の経験をくぐった確固たる自信が窺えるのである。

次いで単一遺伝子病や癌などの悪性腫瘍から、いよいよ本書の題名となった“日常の病気”と遺伝子の関わり合いについて筆が進む。“日常の病気”—多因子病の解析は遺伝子地図が作成されたからといって、すぐにこれを予知したり予防などができる性質のものではない。著者が繰り返し述べておられるように“遺伝と環境”との関わり合いがあるからである(complexed disease)。それにもかかわらず現在のわれわれの想像を超えたスピードで“日常の病気”の遺伝的解析や老化の分子機構が解明

される可能性も秘められている(so near, yet so far)。以上の遺伝子診断から、最後に医学の最終目標である病人の治療、つまり遺伝子治療の現状と将来についてまとめられている。

本書を読むことによって、もはや遺伝子の解析は特定のまれな単一遺伝子病の範囲を遙かに超えていることが理解されるであろう。これらの問題は少なくとも医学に関心を持つ人々にとって、来たるべき世紀の医学を考える上で欠かすことのできない視点である。やがて進化や発生、病気と老化、差別や排除といった難しい問題に正しく対応する“哲学を持った医師”が要求される時代となろう。この時に当たって最新、最高の良き手引書が世に出たことを心から喜びたい。この方面の進歩は文字どおり日進月歩である(例えばアルツハイマー病の研究など)。教授のことであるから、発刊されたその日から改訂の筆が加えられていることと思う。1人でも多くの方々に読んで頂きたい良書として自信を持ってお勧めしたい。

● A5 頁370 図92 写真42 1994
定価 5,150 円(税込) 〒400

医学書院 刊(☎ 03-3817-5657)